

郷土資料 昭和五二年七月三日

第八十回

史跡

めぐり

迎接院
淨光寺

越谷市郷土研究会

第八十回 史跡めぐり

とよ 七月二十日 午前九時三十分

コース 越谷駅(徒歩にて)→神明会田

七五ノ内の墓→四下野会田太郎兵衛

家跡→押入茶師堂→押入五智堂

→淨光寺→北越谷にて解散

会費 二〇〇円

昼食は各自御用意下さい。

目次

一 大房村

新編武蔵風土記稿卷二百六

埼玉郡三八

四三頁

一 越谷市の文化財

第二編末

文化財調査報告書

一九七三年版

市教育委員会

一 大房淨光寺・茶師堂

越谷市の史蹟と伝説

教育委員会編より

大房村

新編武蔵風土記舊巻二百六
埼玉郡之八 四三一頁より

新方領 大房村

大房村は江戸より六里の行程にあり、民戸五十、南は大沢町、北は大林村、東は弥十郎村にして、西は元荒川を隔て、荻島村に及び、東西十一町、南北五町余、用水は須賀村溜井より引くと水未なれば早瀬ありと云、古より御料所にして今も替らず、検地は元禄十年酒井河内守糺せり

注 原本片ヲナ、濁点なければ去を省く

○高札場

西の方にあり

○元荒川

北の方を流る
巾二十六間許

○稻荷社

村の鎮守なり
十手院の持下同し

○八幡社

○弁天社

○麻利支天社

○浄光寺

新義真言宗 末田村金剛院末、熊野山
観音院と号す 本尊十一面観音を安置す

鐘樓

宝暦六年鋳造の鐘
をかく

○十手院

同門徒熊野山不動尊と号す
本尊不動を安置す

◎東光院

開宗三宮村一乗院門徒
本尊阿彌陀を安置す

◎葉師堂

相伝へて大同二年、飛騨工が一夜に建立
せしと云、さばあれ一夜に建てしなど
を証論とす、古よりの像は先年賊のため
に失ひしかば、今の像を安置せり、此の葉師と押入の葉
師と唱ふ、其の真は知らず、慶安五年
五石の御朱印を賜えり、浄光寺の持

◎五智堂

◎地蔵堂

十手院の
持なり

- 1. 元禄十年 検地 丁丑 一六九五 二七七年前
- 2. 宝暦六年 (鐘) 丙子 一七五六 二一六年前
- 3. 大同二年 丁亥 八〇七 一六五年前

注 真言宗

中國の密教を空海が伝えて、新教の呪文を新しく日本で用いた大乗佛教の一宗派、大日経と金剛教を根本教義とする。印を結び呪文を唱えて、陀羅尼の加持力で生き身のままにたたらに佛になる。即身成仏と云く。

東密・真言密教・秘密宗・密宗

越谷市の文化財

第二集 文化財調査報告書
一九七三年版 市教育委員会
十二頁 中央

薬師來座像

所在地 越谷市北越谷 番
薬師堂内

淨光寺薬師堂内に在り、高さ三メートルの座像で、直径一・五メートルの蓮華台に「結跏趺座し、左を跏座の上に仰けにのせ、右手を正面に向けている。袂の材に絹張りて塗装されている。

作者、製作年代については現在不明である。またこの如来像には十二神像も完全にそろっており、この種のものは珍しい。

五智如来像

所在地 越谷市北越谷
薬師堂境内

薬師堂境内にあり、高さ一・六メートルの青銅製の立像である。五智如来とは五智と心得する仏身で阿内像、宝生像、弥勒像、釈迦像、大日像とす。

建立年代は、享保三戊戌（一七一八年十月十五）日、釈迦・弥勒・宝生・大日・阿内の蓮台に刻まれていることが知られるが、由来等については現在不明である。

注

結跏趺座 けっかふざ 仏法の座法の一つ
両ひざを曲げて、両足を組み、足の裏を上向けにして座る

跏は、足の裏、跖は足の表の意

別半跏趺座 未だ仏法の未熟な者が座る方法。
右足の裏のみ上に向け、左は右ひざの下におく
……座り方

修證義など「説経」やりながら行う時に「或は半跏趺座の語が出るが、このことである。

大房淨光寺薬師堂

越谷市の史蹟と伝説

教育委員会編より

日光街道を越谷宿大沢宿を経て日光に至る街道筋に江戸中期より將軍の御旗場として發達した其の一角に当時大森林があり、主として松杉が多かつた。

「今も老松が残つてゐるしこの十町七反の一角に薬師堂がある。当時鴨の森の薬師堂とも呼ばれ「大江りの薬師堂とも言われた。

「大江り」とは、元荒川がこの一角を流れ、潮の干満によりこの薬師堂の位置迄遡水し、又引き潮の時は入江の如き地形を形成する所から、享保年間から明治の中期まで大江りの薬師堂とも呼ばれてゐた。現在この辺一帯まで往古の原型を小高い岡と元荒川の支流らしき小堀をとどめるのみで、樹令約四百年位と思われる大銀杏の大木と老松が生い繁り本堂がそのまゝ残つてゐる。其の外当時の敷石と思われる石片が小高い岡の週辺に散在してゐる。

古老の言に依れば、八。六年大同元年（今

より十百六十六年前建設されたものと云う。而し敷度の火災では、きりした根柢は得られない。現在の建築は大前前から運ばれた建築材をもつて「元禄年間迄造築されたもの」とされてゐるがその年代は明確でない。古老の言によると、日光の御法工に参加のため備前の甚五郎が江戸より日光へ行く途中八月の夕暮れ時、大夕立に逢い一夜の雨宿りをした爲当薬師堂へ仮宿し雷雨をさけて、その時の御礼にと云うので、一夜にして建立したものとされてゐるが、日教の關係で工事半ばにして日光に立ちまつていった。其の当時薬師堂を準備した建築資材の中で「うるし十貫、朱十貫を建築用に用意したが未完成のままなので朝夕、陽の照らす塙所に埋めてそのまま現在に至つてゐるとの伝説があり、又床下に埋まつてゐるとの伝説も伝えてある。朝夕陽のさす所では小高い岡となつてゐるところと思われる。建築様式は岡口四間、奥行四間の単層屋根四注造りの四角堂で茅葺である。現在はこの上にトタン屋根を被つてある。

当時屋根の上に東西に分れて「電とひめし

で統らしてあつたが現今は勾欄は見られない。欄間には毫の彫刻を立派なもので用材は櫨の木目である。

本堂内廊の「こまよせし」の所に元禄十年十月一日の主匠とかかれた額があり五十寸と三十寸位の矩形の部厚い板の額である。本尊は薬師如来像である。

薬師如来像の座像

高さ三米の坐像

直径二米五十七センチの蓮華台に結跏趺座し左手と跖座の上に仰むけに戴せ右手を正面に向けている。絵の木の材木に綱張りで塗装されている。製作者と思われる人物がひさの部令に京都三条上ルと書いてある（註 京都三条の住人奉る。奉納者にして製作者ではない）氏名は現在綱張りをばかせないのでわからないが、相当雄大で立派なものである。

左右に十二神像の立像があるが二度の大地震で首腕のないものもあるが青銅製の武将と粘土製のものとがある、着色してあるものは粘土製の方が多い。左右合計二十四の立像で高さが四十五個である。薬師如来坐像には

御指素野唐時吐吐指せ金羅者とおし生死の言
患を除く故に薬師王匠と稱し、当時盛に太祥
者も多かつた模様であつた。昔八薬師と稱し
巡礼し元荒川には浪舟が教多く集つたやうで
ある。

古老の言によると大銀杏の梢に旗を立て、
これを目標として当時けは仰範園が遠く千葉
栗流山あたりからも来たやうである。当時の
民間信仰としてこの如来像は十二の大願を立
てられる。

十二の大願とは

- | | | |
|--------|--------|---------|
| 一、相好具足 | 五、持戒清淨 | 九、去耶趣正 |
| 二、光明照被 | 六、諸根完具 | 十、息災離苦 |
| 三、所求満足 | 七、除病安樂 | 十一、飢渴飽滿 |
| 四、安立大衆 | 八、転女成男 | 十二、莊具豐滿 |

のこれである。この中で第七番の本願は「我が名号を一度耳に経れば象病志く除き身心安樂なり」とある。この第七願によつて薬師如来と稱する様になつたわけは蓮華台に住し、左手を跖座の上に仰けに來せて右手を正面に向けているのは象生に法性寺流に法樂を施す

して無明妄想の疾愚を癒すことと本誓念願と
してゐる、彫りが荒けずりであるが均整のと
れた象徴的な名作である。高さ約五〇cm位で
ある、古来の文によれば、甚五郎の作と言わ
れてゐる。

古神武天皇上流南巻ニヨリ 才ト即之五

○四所野村

四所野村は江戸よりの行旅用

水基前村に同じ、家数六十六、東は越ヶ谷宿
西は谷中村、西は神前下村、北は元荒川を隔
て大森村なり、東西四町餘、南北へ三町餘、

水等ともに乏ふ、庄係の頃は御料所なりしが
以後御買手に賜ひ、宝曆六年上りて御料所に

罷り合ふ頃、此地は元禄八年御中河内守改
む。

御買手 御買手

小石 御買手 御買手 御買手

御買手 御買手 御買手 御買手

御買手 御買手 御買手 御買手

○神明社 ○稻荷社 ○法円社 ○愛宕社

弘誓寺 迎攝院 新義堂 天正九年寺領五石の御朱印と賜ふ

鐘樓 寶永三年の 鐘は破裂し

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

天正九年六月月日 鐘樓 寶永三年の

しか、元禄十三年平岡主殿・曾六七兵衛・長山孫三郎・菅谷某・中條某に賜ひ、其餘は御料所にて今子孫平岡石見守・曾我豊後守・長山孫三郎・菅谷平八郎・中條鉄太郎等が米地及び御料所なり、用中江戸よりの里叢檢地の年代は前村に用ひ、又後年新廟の地あり、享保十八年三月寛橋唐守純、安永八年十二月伊奈半左衛門政成、共に御料所にして持添の地なり、

高孔場三ヶ所

小名 上佐 四ヶ所 前谷 根河 中組 下組

古綾瀬川

村の南を流る、川幅八割許あり、
 ○新綾瀬川 村の南にあり、川幅十二割許あり、この川に流れて居る石あり、今此流石を是と稱ひて居り、俗に川流石を流石と云く、

稲荷社

村の領地より、東福寺の境内にあり、
 ○天神社 ○山王社

觀照院

昔は、今も、米田村金剛院末、日取山と号す、用山尊處、又僧清海永承三年甲寅で、開基は当村と

道の傍に

稲荷社 此末社として、天神、危濟神の二社を置

観音堂

○持福院 觀照院の傍にあり、兵主大沼明神社
 ○眞福寺 用中江戸より、本寺上に同じ

○神明下村 神明下村は此地に太神宮あるを

もて起りし村名と云、江戸より行抵六里餘、

家敷三十九、東口元荒川を隔て大房村、南は

四町野村、西は西新井村、北は荻島村なり、

東面へ六町餘、南は六町許、用水は前に同

じ、五保の頃は御料所に属す、又村内神明の

縁起中に、寛文五年中土屋相模守當所を領せし

ことと載す、さおは、頃頃御領の領分にて、後

又御料に復せしにや、元禄十三年村を六分に

して、平岡主殿・曾我七兵衛・菅谷某、長山

彌三郎・中條某に賜ひ、餘は御料所にて、今

世子孫平岡石見守・曾我豊後守・菅谷平八郎

長山彌三郎・中條鉄太郎知行及び御料所なり、

此地は元禄十年御井内守政に、

高孔場六ヶ所 御料は村の子の方、本領三ヶ所

小名 在家 沖谷 萩葉 前方 後方

元荒川 村の東より流る、川幅三町より、

四十五町にたり、川流は流を流く、

太神宮 村の傍、別當大行院 本寺修験、百餘坪

本郷は正観寺と
本地所となす

○天王社 ○天神社 ○八幡社

政堂院 本郷は東京四野野村迎福院門徒、月向小と号す。当院は村民七を二門の祖也。会田七を二門政堂。其後、

淨定尼達師のために還俗す。棟札に寛永十九年閏月廿日とあり。此政堂と云は、今田本郷に三師左門正重と云ものぞす。月人に

やちもあらば、大徳十郎氏爲に居せしものなり。寛永は元和八年六月三十日に死せり。又山号は後輩のほ名にて、今正観寺は、政堂が守護佛なりといふ伝入り。

○豊勝院 月門徒、本郷 清光方村持、本郷

